

令和元年6月25日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02156

研究課題名(和文)内藤湖南中国書画論研究

研究課題名(英文)Research for Naito Konan's Chinese theory of calligraphy and painting

研究代表者

宇佐美 文理 (USAMI, Bunri)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：70232808

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：内藤湖南に関わる中国絵画作品の国内外に於ける調査、ならびに内藤湖南の書画論の精読を行い、その結果を国際シンポジウムで発表した後、「内藤湖南の絵画論と阿部コレクション」としてまとめて公表した。なお、平行して行った、泉屋博古館ならびに東京国立博物館の所蔵中国絵画の題跋の講読研究会では、関東、関西の学会員や学生、それも中国絵画専門に限らず、日本絵画の学生を含めて、漢文講読について指導を行えたことは、付随的ではあるが有意義であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

内藤湖南の藝術論の核心について、新しい見解を得た。それは、その時期の日本思想史、日本藝術理論史を考へる上で、今後の研究のための重要な足がかりを作ったと思われる。

研究成果の概要(英文)：After conducting research on Chinese paintings related to Naito Konan at Museums in Japan and abroad, and carefully reading the art of Naito Konan's theory of Chinese painting and calligraphy, and presenting the results at the international symposium, they were published as "Naito Konan's Painting Theory and Abe Collection" did. At the same time, I read the titles and postscripts about Senoku Hakkokan's and the Tokyo National Museum's collection of Chinese paintings, with curators and students from Kanto and Kansai, and not only Chinese painting specialists, but also Japanese painting students. It was meaningful, though incidental, to have been able to give instructions on Chinese Classic reading.

研究分野：中国哲学

キーワード：内藤湖南 絵画理論

## 1. 研究開始当初の背景

内藤湖南の藝術論の重要性に強く気づかされたのは、2011年に、京都大学文学研究科が、関西中国書画コレクション研究会の協力の下で行った市民講座「関西中国書画コレクションと京都大学 収集から一世紀、その意義を振り返る」(大学コンソーシアム京都で一人ずつ五回の連続講座、京都大学東京オフィスで三名による一日の講座を開催)において、「内藤湖南の書画論」と題した発表をしたことによる。

そこでは、湖南の書画論の特徴として、とりわけその鑑賞論に関して、湖南がそれを「歴史的」に考えたというのが一つ重要なことなのだが、さらに、それまでは、「技術」あるいは「技巧」に對置させられてきた、気、あるいは気韻、あるいは画家の人品などの概念、つまり、画の六法以来の、技術を超えた何か、について、中国の歴代の絵画理論や絵画評論が考えてきたものは、きわめて「個別」ととらえられてきたのに対して、湖南が考えた趣味とは、歴史的なものであり、「時代」を意識したもの、あるいは、歴史的に発展する、人間の文化全体のある一面である、ということを示した。だが、この考察の過程で、湖南が題跋で語っている作品に関して、申請者が実見していないこと、さらには、その図版さえも見るできないものが数多くあるという事実が大きな問題であることは明白であった。さらにいうなら、『内藤湖南全集』第十四巻、ならびに『書論』(書論研究会編)において湖南の逸文が集められているものの、この時期に日本にあったがその後海外に流出した書画は数多く、さらに湖南の跋を持っているながら録にもれたものがある可能性は高いと思われる。湖南の書画論の全貌を把握するためには、これらの作品の実見と、逸文調査が必須のことになると思われる。

なお、ここに言う「関西中国書画コレクション研究会」は、関西において中国書画を豊富にコレクションする九つの美術館博物館ならびに個人コレクションの担当学芸員を中心に、中国絵画史を専門とする京都大学名誉教授曾布川寛氏を顧問として発足した研究組織で、申請者も藝術理論、さらに漢文を専門とする立場から、発足時から参加している。幸いなことに、この研究会では、ほぼ毎月一度、開催担当館を決めて、各館の所蔵品調査ならびに所蔵品につけられた題跋等の会読を行っており(現在までに49回開催)、既に上記に該当するいくつかの作品の調査は終わっている。

湖南の中国絵画あるいは中国藝術についての発言について、ほとんど研究が進んでいない原因には、湖南の絵画史の記述、とりわけ個別の作品についての言説が、ほとんど現在は見向きもされないということがある。それは、湖南の『支那絵画史』のちくま学芸文庫のあとがきで曾布川寛氏が述べるように、湖南の中国絵画史研究は、当時湖南が見ることができた中国絵画作品が非常に限られていたことから、湖南の『支那絵画史』そのものを、その「時代性」を考慮に入れて読まねばならず、従って、現代の中国絵画研究の中では、湖南の研究成果を学術研究に引用することは、ほとんど皆無と言っていい。たとえば、ある画家の作品研究をする際に、湖南が「真筆」と考えていた作品のほとんどが、現在ではまったく別人の作品、あるいはせいぜい模本に過ぎぬものばかりであったからである。そのことは確かな事実である。

そのような研究状況の理解のもとで、本研究は、いわば立ち後れていた内藤湖南藝術論研究に対して、新しい一歩を踏み出そうという試みである。

## 2. 研究の目的

近代の東洋史研究の泰斗である内藤湖南(1866~1934)の手法と業績は、いまま現代の中国学者全体に大きな影響を与え続けており、湖南の学問や研究についての論文や研究書は枚挙にいとまがない。ただ、湖南の全集第13巻の「中国絵画史」に関する研究は、必ずしも多いとは言えない。本研究は、湖南の中国絵画に関する思想を、彼が実際に見た作品の中国書画文化における意味とともに再考することを目的とする。

## 3. 研究の方法

2016年度には、おもに、『内藤湖南全集』所載の内藤湖南跋を一覧化し、『唐宋元明名畫大観』『宋元明清名畫大観』『支那名畫宝鑑』所載のものはじめとして、それぞれの跋の現蔵状況、また既に行方が分からなくなっているものについては各種図録に記録のあるものをデータ化する作業を進めた。

また、分担者竹浪氏ならびに関西中国書画コレクション研究会の諸氏の協力の下、大阪市立美術館(6月23日、内藤湖南跋、箱書きの撮影)、東京大学東洋文化研究所(9月5~6日、アメリカ所蔵中国絵画における湖南関連作品の資料閲覧)岡山県立美術館(12月3日)等において、内藤湖南関連の書画の調査を行った。とりわけ岡山県立美術館では、内藤湖南跋を持つ当館所蔵の夏圭『山水図』の調査を行い、附属資料として存在した旧蔵者の守屋氏の書簡などの調査もなされ、これは内藤湖南の跋が書かれた経緯などを知るための資料であり、作品が実見できたことはもとより、有意義な調査となった。また、3月15日には、岡山大学におけるシンポジウム「瀬戸内の塩が育んだ近代東アジアネットワーク 児島、野崎家に集った「人」と「書画」」に参加し、内藤湖南のコレクションと関係が深い羅振玉旧蔵書画についての発表を聴講した。

2017年度は、前年度に引き続き、内藤湖南跋の読解と分析を行った。なお、年度内の調査としては、彼の絵画論に密接に関わる下記の作品について調査を行った。海外ではボストン美術館(9月21日)唐・閻立本「歴代帝王図巻」、クリーヴランド美術館(9月25日)南宋・米友仁「雲山図巻」、メトロポリタン美術館(9月28日)元・呉伯理「流水松風図」。また国内では、京都国立博物館(5月10日)仇英「聴琴図」、大原美術館(12月12日)岡山県倉敷市(以上二件は関西中国書画コレクション研究会と共同調査)内藤湖南「伝董源群峯霽雪図巻跋」、神戸市立博物館(2018年1月20日)北宋・徽宗「五色鸚鵡図巻」、南宋・陳容「九龍図巻」(「ボストン美術館の至宝展 東西の名品、珠玉のコレクション」展示)、田辺市立美術館(和歌山県田辺市)(2018年1月27日)内藤湖南「尚書正義跋」(1929年)の予備調査(所蔵把握)、ふくやま書道美術館(広島県福山市)2018年3月30日内藤湖南「王キ、山水図幅跋」調査(冬の所蔵品展「山水画を楽しむ」展示)などを調査した。さらに、図版調査として、Christie's Hong Kong: The Fushoutang Collection Important Classical Chinese Paintings From Japan, Hong Kong, 2000.、副寿堂コレクション(斎藤董安旧蔵品等)の売り立てカタログから、内藤湖南跋の検出を行った。

2018年度は、内藤湖南の絵画論研究をまとめて論文にする作業と、内藤湖南の題跋作品および、彼の絵画観に影響を与えたと考えられる作品について調査を行った。調査は、7月27日(金)~28日(土)長野県富士見町にて、湖南ゆかりの原田博文堂関連の調査矢澤コレクション(原田家ゆかりの書画)調査、原田家別荘(三岳荘)跡、旧犬養木堂別荘(白林荘)、旧阿部房次郎別荘の見学、2018年9月21日(金)故宮博物院南院(嘉義)にて「品牌故事乾隆皇帝の文物收藏与包装芸術」展を見学、2018年10月8日(日)大阪市立美術館にて(伝)李成・王曉「読碑(穴+果)石図」の特別観覧調査、2019年1月22日(火)東京国立博物館にて館蔵品および橋本コレクション作品調査、「特別展 顔真卿展」を見学、2019年2月19日(火)泉屋博古館にて住友家旧蔵の中国絵画表装調査、などを行った。そして、研究年度全体を総括する研究論文「内藤湖南の絵画論と阿部コレクション」を、『平成30年度特集展示「生誕150周年記念阿部房次郎と中国書画 開催記念国際シンポジウム報告書 阿部コレクションの諸相 文化的意義とその未来』に発表した。

#### 4. 研究成果

三年間の調査研究を通じて明らかにした内藤湖南の書画理論についての知見は以下の通りである。最初に湖南の絵画論についての考え方の特徴をまとめておく。湖南の絵画論は、伝統的な議論を踏襲する部分と、彼独自の新しい発想とがある。まず、伝統的な考え方に沿っているものをみておく。以下の二つの文章は、いわゆる「人格主義」の考え方を示すものである。「趙魏公夫人管氏の画は、幽婉淳雅、其の人と為りの如し。此の采筆の蘭花小品、風神綽約、南渡後の画院諸人の企及せざる所なり。」(「題管仲姬采筆蘭花図」)「豈に作者の人品本より高く、其の藝に寓する者、自然超妙なるに非ざらんや。」(「銭舜拳柴桑翁図巻跋」)文人画理論に典型的に見られる、「人となり」や「人品」が作品に現れるという考え方を湖南はそのまま用いている。なお、以下の文章も人格主義について述べたものだが、注目すべき点がある。「宋時代になつて、山水画が盛んになつて来ると、此の気韻生動の意味を画家の人品の意味という方面から考へた。」(「絵画史」『内藤湖南全集』13巻49ページ。(以下、13-49、のように記述))人格主義は、宋代に大きな変化(人格主義の台頭)があったことはよく言われることだが、それが、山水画が盛んになったことと関係するのだ、というのは湖南の見識である。また「山水の極地、能く胸中の丘壑を運らすに在り。所謂胸中の丘壑、宜しく関全を以て祖と為すべし。嗚呼、画は関全に至り、已に古今の一大変を窮めたり。関全出で、然る後に赤嶽始めて山水画有り。李范董巨有りと雖も、皆な風を聞きて興る者にして、豈に如全の英雄特起せるに如かんや。画を論ずるに此の一大変を知らざれば、何ぞ画を知ると謂ふを得んや。」(「関全待渡図跋」)に見られるように、画家の内面の重視という宋代の変革において、胸中の丘壑(ここでは関全の)というものをひとつのメルクマールとして考えている、ということが重要である。次に、「道」について。「古画自ら神の技より進める有るを知るべし。」(「毛益狗子図跋」)この「技より進めり」は、まさしく『莊子』の「ことばをそのまま用いたものである。そしてこれは技術論とも直結する。中国藝術では「自然な技術」が賞ばれるわけだが、これについては、以下のような発言がある。「高渾莽遠、全く刻画の痕を絶つ。真に神品なり。」(「董北苑群峯霽雪図巻跋」)この「刻画」は、「人為」の代名詞のようなものである。もとは『莊子』の渾沌説話のなかで混沌に穴を穿つ「のみ」がイメージされる。もちろん、これは董源の絵なので、董源が米芾によって「天真」と表現されたという歴史的な事実を踏まえての評論となっている。そして、南宗画あるいは文人画が、その作者にも観者にも基本的に要求する文人的な素養というものを、湖南が前提とするのも、また当然のことである。そして、湖南がしばしば取る手法に、「画史を使った評論」がある。「郭若虚、嘗邱を評して、氣象蕭疎、煙林清曠、毫鋒穎脱、墨法精微なる者と謂ふは、此の卷之を得たり。」(「李嘗邱夏景青嵐図巻跋」)ここでは、まず「過去の評論が過褒でない」ことを確認する。さらに、過去の評論の文章を、現存作品の「ここがそれにあたる」と確認する。これは、画史の確認と言えば確認なのだが、歴史と現実を組み合わせることによって「ほめる」のであって、湖南は単純に「この作品はすばらしい」とか「こういう点がすぐれる」という言い方をあまり取らない。ともかく湖南は著録を重視した。「女史箴図」について宋代模写

説を否定するのも、著録から推定された意見である。その著録重視の態度は、たとえば以下の発言によく表れている。「夏士良云ふ、舜拳は人物山水を善くす。花木翎毛は趙昌を師とし、青緑山水は趙千里を師とす。尤も折枝を作るを善くし、其の意を得たる者は、自ら詩を賦して之に題す。…自ら小詩を賦し、其の後に書せり。書法は張樞察に近し。蓋し亦た得意の図ならん。」（「錢舜拳仏図澄淨定図巻跋」）ここでは、この図巻には実際に自題がついているので、夏文彦が記しているように得意の作なのだろう、という判断を下している。こうやって、画史の記述に色々な意味で依拠すること自体は、中国書画の跋の一つの手続きではある。ただし、最初から支那の画評は主観的に批評されてゐるから、その心持でみななければならない。（「絵画史」13-48）ともあって、湖南の著録重視は、絵画批評に関するこのような考え方が背後にあるのかも知れない。いずれにしても、ここまでは、伝統的な画論に従った湖南ということになる。続いて、書についても見ておく。「北派の書の中で一番ぢゞむさい書をよしとして、それを書の絶頂のやうに云つているのであります。……大体可笑しなもので、何か釣合はない変な形の整はないものも、しよつちゆう見て居るといふと、その中で成るべく形の余計整はない偏つたやつが段々面白くなる傾きがあります。」（「書論の変遷について」8-59）この「ぢゞむさい」というのが彼の書論の大きなポイントである。書には、その人のスタイルというか、その人の文字というものが出やすい、というのは、現代の我々にも、理解しやすいことだと思われる。そして、そのような人間の個性とでもいうものを素直に出せることをよしとする。それは、中国の藝術の一つの特徴でもあるわけだが、それに対して絵画は、そのような「その人らしさ」を出すのは実は非常に難しい。誰でも、身近な人間に葉っぱの絵を描かせて、それを他の人の画いた葉っぱと較べてその人のものかと言いつてるのは非常に難しいと思われる。それは絵が描ける人であっても同様であろう。ただ、その場合には、誰に絵を習ったか、どういう系統の絵を習ったかということに非常に大きく影響されることになる。しかし、それではいけない。だれの絵かわからないようではいけないのである。それは、様式、あるいは描き方の問題ではない。美術史の人が、「これは雪舟の絵かどうか」と判断するレベルの話ではない。もっと大きなところで、というか、絵全体に現れるイメージ、あるいは個性、さらに言うと、後に問題にする、絵を描いた人の、自然の風景を見る見方とか、あるいは湖南が「趣味」と呼んでいるもの、そういうものが現れていることを要求するのである。次の文章は、この湖南の発想と絵画の関係を考える上で重要である。「趙子昂までは、専門家に伝えられた修練を経た型に随つて稽古するのであつたが、四大家の人々はそれとは異なり、寧ろ努めて専門家の筆法に入らぬやうに、素人の気分を出すやうに、書を書くやうな積りで画を画いたのである。」（「絵画史」13-189）書を書くようなつもり、とは、要するに、誰かの画法（描き方）にならなくて画くとか、そういうことを考えず、みずからの個性をそのまま発揮して、つまり、みずからの「趣味」のおもむくままに、自分にそのように見えた自然の風景を、描くようになった、ということである。さて、そこでこの「趣味」という考え方が大きな問題になるのだが、この「趣味」とは何なのか。湖南は、「技法」と「趣味」という対概念でいろいろと考えている。「近世期の画の特色とも云ふべきは、画風が専門家の風を離れて、技巧を超越した一種の風格を生じたことである。之は一面より云へば素人趣味の興隆である。しかし此に云ふ素人趣味とは、単なる原始的な素人の意ではなくして、専門の技巧を超越した、洗練された素人趣味である。」（「近世期の支那画」13-525）この「趣味」がどのような位置づけなのか考えてみる。それは、いわゆる画の六法が、気韻生動 骨法用筆 応物象形 随類賦彩 經營位置 伝模移写とされるように、中国の画論は、技術を超えたところに設定された「気」と、その他の「実際の技法」という枠組みで考えてきたわけだが、湖南は、この「技術とそれを超えたなにか」という基本的な中国絵画の構造に従いつつ、「気」という概念ではなく、「趣味」という言葉でもって説明を試みている。先の引用において重要なのは、「洗練」という言葉である。書において、北碑の書を「ぢゞむさい」と評したことは、これと深く関わる。そして、この趣味というものは、単に画家や批評家の個人的な趣味というものではない。中国の画論は、この気韻を、まさしく個人的なものとして考えてきたわけだが、この「趣味」はそのような個人的なものではなく、もうすこし大きな概念として、つまり、「歴史的に変化するもの」として考えているところに湖南の大きな特徴がある。作家の個性は、この趣味の洗練によって、貴族趣味がもたらした型からの自由が獲得されることによって発揮される、と湖南は考えるのである。要するに、「技術とそれを超えたなにか」という構造の中で湖南が考えたものは、伝統的なあの「気韻」ではなかった。「帝王の好むのは多くは道楽の画であつて、気韻とか何とかいふ旋毛の曲つたことではなく、面白く綺麗に描くといふことを尊ぶのでありますから、画が盛んになる時代でも画院の画は大抵さういふやうに傾く。」（「清朝史通論」8-346）ここに気韻を「旋毛の曲がった」としているように、湖南は、気とか気韻とかいう、中国の絵画論が常に使用してきた、抽象的な概念群による絵画評価というものに少し距離を置いていたことは確かである。そして、この「趣味」の問題は、湖南の理論のもうひとつの特徴である、絵画の「歴史」についての湖南の思想と直結している。「惟ふに夫れ美術なる者は、常に歴史の副産物たり、当代社会の狀態は、促して当代美術の風格を形作り、美術は実に社会の影子たる也」（「受賞後の美術館」13-471）これが湖南の美術と歴史との関係についての基本的な考え方である。そして、湖南の絵画の「歴史」に対する目は、たとえば次のような文章にも現れる。「最近世に於ける支那の絵画といふものは、近世でも比較的古い時即ち宋元時代を経て、だんだん成熟して来たのであつて、一足飛びに最近世の絵画が出来たのでは無い。それであるから、これを批評し鑑賞する方から言つても、矢張りそれだけの段階を経ないと、

充分の理解力を生じて来ないのが当然である。」(「南画小論」13-298) このように、藝術について歴史的な大きな流れというものを湖南は意識している。もう一例挙げておこう。「それは藝術といふものは孰れの国でも、多くは文化が爛熟した上に発達する所のものであるので、文化の萌芽する時に生ずる所のものではない。文化の爛熟するときは、国家としては衰頹期に向つて居る時に多いのである。それであるから国家の歴史から考へると、何時でも亡国の思想、亡国の藝術といふものは、次に来る新しい時代を支配することが多い。」(「南画小論」13-300) さて、そもそも湖南は歴史というものをどう考えていたか。湖南は、明代の「人物の褒貶を旨とする歴史」ではなく、清朝の「史実を研究する史学」を強く主張する。それと、そもそも「評価」が大きな意味を持たざるをえない絵画史の記述というものをどう考えるかは、非常に難しい問題である。しかし、湖南の絵画史あるいは絵画に対する見方を考えるときには重要な観点となる。歴史の記述とはいかにあるべきか。「歴史家が其の材料を選択して、新しく筋の通つた生命のある歴史を作る」(「清朝史通論」8-271)つまり、「史実」とはいうものの、湖南は歴史記述については、「材料の選択」と、「一本筋を通すこと」の二本を柱として考えている。そして、湖南の絵画史について言うなら、材料つまり史料の選択としては、冒頭に触れた、この辛亥革命前後に湖南が新たに見聞した作品群がそれにあたることになる。いままで日本人はあやまった史料によって、中国の絵画の歴史というものをイメージしてきた。それに対して、湖南は新しい史料群を示したわけである。その史料群の重要な一角をなすのが、たとえば大阪市立美術館所蔵の阿部コレクションである。そして、もう一つの柱である、歴史には「新しく筋の通つた生命」がないといけな、ということに関しては、この「筋」として、湖南は、先に考察した「趣味」というものを考えた。つまり、「趣味の歴史」として絵画史を記述しようとしたのである。湖南は「評価」ではなく、「史実」を問題とした。従つて、絵画史を構築する場合、それは「評価の歴史」ではいけないわけなのだが、かといって、「評価」がまったく存在しない絵画史など、そもそも意味があるのか。そこで湖南は、「趣味」というものをもつてきて、「趣味の歴史」として記述をすることになる。なお、湖南は、「是は余程趣味の上に苦心をした結果で、黒人藝をもう一段進歩させて、全く渣滓の洗ひ尽されたものにしようといふので、趣味から云へば、黒人の上に更に超越して黒人に行かうといふので、之を素人趣味と云ふが、実は黒人に至らない素人趣味でなくして、もう一つ先きへ行つた素人趣味である」(「絵画史」13-260)と述べたあと、そこで取り上げられている時期の(嘉慶道光の)画家の「力量」は清初の名家に及ばないとしており、「力量」と「趣味」を別物として考えていることに注目すべきである。さらに、「四王呉惲の中でも、画の上手下手を云へば、王原祁などは最も下手と云つてよいのであるが、其の代り素人風の面白味がある。支那では此の趣味を土氣と称して尚ぶのであります。...多く名画を見た鑑賞家には、妙に技巧を軽蔑する傾きが出て来るものと見えて、技巧を離れて土氣に傾いて来るのであります。.....趣味から云へば玄人の上に更に超越して玄人に行かふといふので、素人趣味とは云ひますが、実は玄人に至らない素人趣味でなくして、もう一つ先きへ行つた素人趣味であります。」(「清朝史通論」8-440)とあるように、趣味と鑑賞は非常に深い関係を持っている。「此の時分(筆者注:五代から宋の初め)から絵画は単に説明の為でなく、自分の精神を表現する為に描くといふ事が起つたので、それが又五百年経つた後、元末からして絵画は単に専門の画工の手になるべきものではなくして、苟も鑑賞力のあるものであるならば、何人でも手を下し得るものであるといふことに進んで来たのである。」(「南画小論」13-308)もちろん、単純に鑑識家と画家が一致すると考えたわけではない。「技に妙なるの人、必ずしも鑑識に精ならず、ただ、鑑識力が必要である、ということを使うにすぎない。いずれにしても、湖南がこのように「歴史的」に考えたのは重要なことなのだが、さらに注意すべきは、先にも触れたが、それまでは、この「技術」あるいは「技巧」に對置させられてきた、氣、あるいは氣韻、あるいは画家の人品でもいいのだが、それらの概念、つまり、画の六法以来の、「技術を超えた何か」について、中国の歴代の絵画理論や絵画評論が考えてきたものが、きわめて「個別」なものであった、ということがある。そして、湖南が考えた趣味とは、歴史的なものであり、「時代」とでもいうものを意識したもの、あるいは、歴史的に発展する、人間の文化全体のある一面である、ということが重要である。そこが、湖南の絵画史あるいは絵画論の持つ大きな意味であろうと思われる。なお、湖南にはきわめて近代的な発想もみられるのであって、「自分が手に表はす所の筆法と自分の見た自然とが、どこかでぶつかつて、それが画に現はれて来るといふ風であった。」(「絵画史」13-190)あるいは谷文晁の最初の画稿には「文晁其人が实景に打たれて知らず識らずの間に現した所の面白味」(「本邦南画の鑑賞について」13-429)がある、としていることなど、これらはきわめて近代的な発想といえよう。ここで、画家と風景との「出会い」あるいは画家の技術と風景との「出会い」というものに湖南は注目している。それは、ある意味では、伝統的な「感興」とも言えるのかもかもしれないが、それだけではなくて、「美術の美とは、人間の手を通じて現はれたる美なり、自然の美とは間あることを知らざるべからず」(「読画齋画話」13-488)とされるように、人間の技術を通して現れるある存在というものを考えている湖南は、「自然の技術」が志向する二つのもの、すなわち、「自然そのもの(ここでは風景そのものということになる)」あるいは、「人間の作為のない技術」を目指すのではなく、まさしく人間の作為であるところの技術が、風景や対象と出会うことによって、新しい存在、美術、あるいは絵画というものが生まれる、という、新しい発想のもとにあるといつてよかろう。これは、湖南に独自の発想というわけでは無論ないが、そういう近代的な発想をも導入して湖南は絵画に対する考え方を述べているということは指摘しておく必

要がある。つまり、湖南は「歴史的」に考えた、というのが一つ重要なことなのだが、さらに重要なことは、それを「趣味の歴史」ととらえたことである。湖南までは、「技術」あるいは「技巧」に対置させられてきたのは、「気」あるいは「気韻」あるいは画家の「人品」などだった。そして、中国の絵画理論が、技術を越えた何か、として追求してきた概念、つまり伝統的な「画の六法」における「気韻」の重視以来、中国の歴代の絵画理論や絵画評論が考えてきたものは、きわめて「個別」なものであった。それに対して、湖南が考えた「趣味」とは、歴史的なものであり、「時代」とでもいうものを意識したもの、あるいは、歴史的に発展する、人間の文化全体のある一面を示すものだった。そこが、湖南の理論の持つ大きな意味である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 9 件)

宇佐美文理、「漁楽図」の変遷について、『古典解釈の東アジア的展開 宗教文献を中心として』(京都大学人文科学研究所) 査読無、2017、205-235

竹浪遠、『全五代詩』にみえる絵画関連資料 2、『京都市立芸術大学美術学部 研究紀要』61、査読無、2017、1-29

竹浪遠、京都市立芸術大学芸術資料館の中国絵画(1) 人物画(伝)仇英「採蓮図」、査読無、『美』201、2017、1-5

宇佐美文理、杜甫詩における視覚の問題、『日本中国学会報』69、査読有、2017、64-77

竹浪遠、京都市立芸術大学芸術資料館の中国絵画(2) 山水画 汪ホウ; 溪山明微図、『美』202、査読無、2017、1-5

竹浪遠、京都市立芸術大学芸術資料館の中国絵画(3) 花鳥画 筆写不詳 花鳥図、『美』203、査読無、2017、1-5

宇佐美文理、内藤湖南の絵画論と阿部コレクション、『平成 30 年度特集展示「生誕 150 周年記念 阿部房次郎と中国書画」開催記念国際シンポジウム報告書 阿部コレクションの諸相 文化的意義とその未来』、査読無、2019、151-161

宇佐美文理、文藝学会公開講演会筆録 見えないものを表現すること、『文藝論叢』92、査読無、2019、78-89

竹浪遠、(伝)李成・王暁「読碑(穴+果)石図」を読み解く、『平成 30 年度特集展示「生誕 150 周年記念 阿部房次郎と中国書画」開催記念国際シンポジウム報告書 阿部コレクションの諸相 文化的意義とその未来』、査読無、2019、27-52

〔学会発表〕(計 4 件)

宇佐美文理、見えないものを表現すること、2018 年度大谷大学文藝学会公開講演会(招待講演) 2018

宇佐美文理、内藤湖南の書画論と阿部コレクション、生誕 150 周年「阿部房次郎と中国書画」開催記念国際シンポジウム「阿部コレクションの諸相 文化的意義とその未来、2018

USAMI Bunn, An Explanation of the Relationship Between Maps and Shan Shui Paintings, The 7th international Symposium Old Maps in Asia (国際学会) 2018 年

竹浪遠、(伝)李成・王暁《読碑(穴+果)石図》を読み解く、生誕 150 周年「阿部房次郎と中国書画」開催記念国際シンポジウム「阿部コレクションの諸相 文化的意義とその未来、2018

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：竹浪遠

ローマ字氏名：TAKENAMI Haruka

所属研究機関名：京都市立芸術大学

部局名：美術学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 70463445

(2)研究協力者 なし